【資料紹介】

翻刻　渡部寛一郎日記4下（大正五年）

渡部寛一郎文書研究会
（要木純一・竹永三男・板垣貴志・内田融・大原俊二・居石由樹子・小林啓治・小林奈緒子・杉谷直哉・原洋二・本井優太郎・森安章）

摘　要

渡部寛一郎文書は、渡部寛一郎日記、剪淞吟社に結集する人々の漢詩と関連文書、若槻礼次郎ほかの渡部寛一郎宛書簡、私立中学校修道館など渡部寛一郎が関わった教育関係文書などで構成されている。中国文学・歴史学などの学際的研究によってこれらの諸文書を解読・分析し、近代日本の漢詩文学と政治文化の関連を山陰地域に即して実証的に追究することが本プロジェクトのめざすところである。前回は、渡部寛一郎日記第四冊（大正五年）の手帳に記された、渡部寛一郎が朝鮮を旅行した前半部分の日記記事を翻刻紹介したが、今回は同日記の後半部分を扱う。寛一郎が木次の漢詩人横山耐雪を訪ね、詩会を催した経緯を記す。また、前回の朝鮮紀行を補うメモ部分も付録されている。

キーワード：渡部寛一郎　木次　横山耐雪　小廬山　教育　漢詩　朝鮮

【解説】

「渡部寛一郎日記」（以下「日記」と略記。松江市新雑賀町原洋二氏所蔵「渡部寛一郎文書」）の中、前回翻刻したのは「朝鮮出遊紀行録」で、本誌前前号掲載の【表1】「渡部寛一郎日記」の目録番号1‐4の手帳に収録されている。今回翻刻するのは、同日記の後半、同年一〇月の島根県大原郡木次行の記事で、寛一郎が木次の漢詩人横山耐雪を訪ね、詩会を催した経緯を記す。ただし、寛一郎が発熱に苦しむ様子を記して、唐突に終わる。また、前回の朝鮮紀行を補うメモ部分も翻刻した。

以下、日記の順を追って、簡単な注を加える。

木次行日記部分

・大正五年十月十九日分

簸上軽鉄―簸上軽便鉄道。現木次線の前身。県や地元の長年の敷設運動が実り、大正五年十月十一日開通（宍道駅～木次駅間）。その八日後に寛一郎は乗車して木次に向かったのである。なお、『簸上鉄道の開通と木次線』（稲田信、沼本龍著　八日市地域づくりの会出版）参考。

・廿日分

横山耐雪―一八六八―一九二三。明治・大正期の漢詩人。日登村にて、医院を営む。漢詩結社『剪淞吟社』を結成。その機関誌「剪淞詩文」の編集を担当し、社長として、山陰の漢詩壇の中心人物であった。自宅付近の景勝を、中国の廬山に倣って小廬山と名付け、しばしば社友を招いて、詩会を開いた。

秋霰閣―耐雪の自宅の雅称。王維・崔九弟欲往南山馬上口号与別「城隅一分手、幾日還相見。山中有桂花、莫待花如霰」（後出）による。庭の桂（キンモクセイ）が秋に霰の如く散るので、このように名付けた。

伊藤中将―伊藤黙斎。「剪淞吟社姓名録」（『剪淞詩文』第二篇付録）によれば、松江旅団長　陸軍中将　通称瀬平信州高遠人。

田代活処―医。名は習。慶応二年生。茶町住。

井上井蛙―医。法吉村。通称留五郎。明治六年生。

この日の唱和詩が「小廬山観瀑集」（『剪淞詩文』第七篇付録）に所載。参考を見よ。

・廿一日分

篠坂―『出雲国風土記』仁多郡志努坂野、現在の鯛の巣山。

天野屋―木次のいわゆる桜並木沿いにある旅館兼料理屋。明治二四年創業。現存。

・廿三日分

帰木―木次に帰ること。

メモ部分

朝鮮関係は、前回翻刻分と重なる部分が多い。植民地朝鮮における教育史の研究については、以下を参考。

① 吉野鎮雄・宮田節子・梶村秀樹「朝鮮における初等教育の実際」『東洋文化研究』一五、二〇一三年、二一五―二四七頁

② 古川宣子「朝鮮植民地教育 教育実態と政策」『東洋文化研究』二〇一三年、一七五―二一四頁

③ 有松しづよ「日本統治下朝鮮における朝鮮人高等女学校生徒の「皇国臣民」化」『植民地教育史研究年報』一六、二〇一三年、二六―四九頁

④ 稲葉継雄『朝鮮植民地教育政策史の再検討』（九州大学韓国研究センター叢書1）九州大学出版会、二〇一〇年

⑤ 佐藤由美『植民地教育政策の研究 朝鮮・1905―1911』龍溪書舎、二〇〇〇年

・折込（手帳に挟まれたメモ）

実習女学校　三島一平―慶応二年九月七日川古山中（現佐賀県武雄市）生。朝鮮立教高女高長の教職にあって逝去。実習女学校本校は釜山富平町一丁目にあった。大正三年三月開校した向陽学園の後身。学園は三島一平の創設したもの。

・手帳の罫なしメモ書き込み部分

釜山富平町―現富平洞。遊郭のち市場。
同上岸本町濱田貿易商店―昭和期大倉町。現中央洞。
京城中学校長　柴崎鉄吉―日本では、福岡県立修猷館館長など歴任。著書に『学校管理法　法規適用』など。
外　内―昌徳宮のこと。
禁苑―秘苑のこと。
翠寒亭―対聯は「京城見聞雑記」の方にも記載。
教宗―教内の宗の意。禅宗でいう、自宗以外の宗派の総称。禅宗が教外別伝であるのに対し、他の諸宗は経論の文字、言句によって教義を説くところからいう。教家（きょうけ）。
袞―袖の本字。『詩経』にあり。
観察使　金嘉鎮―一八四六～一九二三。朝鮮の政治家。憲宗十二年生まれ。駐日公使館参賛官をへて一八九四年金弘集内閣の農商工部大臣。一九〇五年大韓協会会長となり、愛国啓蒙運動を展開。韓国併合後、日本からの男爵位を拒否した。一九一九年の三・一独立運動に参加し、上海に亡命。一九二三年その地に没した。七八歳。慶尚道出身。号は東農。
書堂―錦南書堂のことか。
舎廊―男子の部屋。
巨鐘銘―演福寺鐘として有名。
大元至正六年云々―一三四六年（当時高麗は元の属国）。
善竹橋　鄭氏遭難地―鄭夢周（一三三八～一三九二）は、高麗末の儒学者。号は圃隠（後出）。朱子学を学び、科挙に状元で及第した。李成桂らとともに女真や倭寇の征伐に参加し、功績を立てる。一三七七年には日本に赴き、室町幕府の九州探題である今川貞世（了俊）と折衝にあたる。一三八八年、李成桂がクーデターを起こし政権を掌握すると、彼とともに新王の恭讓王を支えたが、禅讓を受けて李氏朝鮮を開こうとする李成桂と対立したため、李成桂の子の李芳遠の手により開京の善竹橋で暗殺された。鄭夢周は教育にも力を注いで多くの弟子を育成したので、のちに「東方理学之祖」と称えられた。
崧陽書院―鄭夢周の家が元になっている私学で、李氏朝鮮時代の両班の子息のための儒学教育機関であるとともに、鄭夢周をはじめとする高麗の儒学者たちを祭る場所でもあった。
善竹橋―鄭夢周の家（のちの崧陽書院）から五百米ほどの場所にある橋。鄭夢周が暗殺された場所。橋の近くに表忠碑が二つあり、北側の石碑が一七四〇年、南側の石碑が一八七二年に建てられた。いずれの石碑にも鄭夢周を供養する碑文が刻まれている。
横山耐雪君村荘　小廬山観瀑分韻得佳―詩会で「佳」の韻のくじが当たったこと。

〔凡例〕

一、本号では、「渡部寛一郎関係文書」（松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵）から、渡部寛一郎日記第五冊の一部を翻刻する。本文は横罫の手帳を縦書きに用いて、大正五年の記事を載せる。メモ部分は白紙で縦長に用いる。主に、朝鮮旅行記とメモ、木次地域訪問記とメモの二つの部分から成り立っている。今回は、前回に引き続いて後者の翻刻を行った。
一、原本は、淡緑色革表紙、横罫十六行の手帳である。横約八・〇センチ、縦約一二・五センチ。表紙左下隅に「Y85」が金字で刻されて

いる。

一、読みやすいよう句読点を附した。句読点の付け方には統一的な基準はない。原文にも句読点が付けられているが、必ずしも本稿のものとは一致しない。

一、合体字はカタカナ書きとした。

一、漢字は原則として常用漢字体を用いた。

一、不明文字・判読不能文字は、字数に従い、□□とする。字数が不明な場合は、〔　〕を用いた。

一、本文は、削除や後補が錯綜しているが、後補したものを含めて翻字し、削除や訂正は、必要と判断したもののみ、削除記号を付して、訂正前を示したり、注記をしたりした。

一、適宜【　】を付して注記を補った。

一、原文の改行は、特に必要と認めた場合以外は追い込みとした。逆に読みやすいように、改行した部分もある。

一、本文の文字サイズは同一とした。小字注は（　）を加えて示した。特にメモの部分は、内容を捕捉することに重点を置き、縦書き・横書き・見せ消ち・文字の大小・改行・空白など、必ずしも原文の体裁の通りではない。

［本文翻刻］

◎大正五年十月十九日、松江出発。簸川上軽鉄ニ便乗木次ニ至リ、石橋方ニ投宿。

翌廿日、横山耐雪ヲ其宅秋霰閣ニ訪フ。松江吟友伊藤中将ヲ始、田代活處、井上井蛙三氏、後ヨリ至ル。此日秋天快晴。暫ク秋霰閣ニテ小憩。小廬山ニ至リ観瀑。瀑下小亭アリ。酒肴ヲ設備セリ。一人一瓢一臺ヲ渡シテ、随意ニ飲酒セシム等等、其趣向甚宜シ。共ニ小亭ニ小憩シテ、昼餐ヲ喫シ了テ、六時前秋霰閣ニ帰ル。稍アリテ、順次ニ入浴シテ、坐ニ復ルヤ、夕餐ノ配膳アリ。互ニ開襟快談。酒間、王維ノ（山中有桂花）ノ句字ヲ分テ、聯句七絶四首ヲ作リ、酒饌撤退后、記念ノ為主人ノ需ニ応シテ、聯句ノ合作ヲ為シ、了、寝ニ就キシハ、午前二時ナリキ。

廿一日快晴、如前日。午前五時起床。田代活処、井上井蛙ト余三人ハ、喫飯后、直ニ辞シテ帰途ニ就ク。暁天、仁多大原郡境ナル所謂篠坂（シノサカ）ヲ踰ユ。三人分韻シテ（暁過篠坂）ヲ賦スルヲ約シタリ。

○小廬山及秋霰閣ト其詩分韻、別紀ノ如シニ在リ。

○午前八時前石橋方木次、二人ト別レテ石橋方ニ投宿、直ニ床ヲ展ベテ枕臥静養セリ。午后按摩ニ□技セシム。五六時ニ至リ発熱、三八。五歩強ヲ示セリ。依テ静養セント欲セシモ、福間、石橋二氏ノ好意ニテ、天野屋ニテ晩餐ノ用意アリトノ事ニテ、推シテ出席小酌ヲ共ニシ、且晩餐ヲ喫シテ帰リシモ、其時ハ格別ノ悪感寒ナカリシモ、一時又々発熱三十八度五歩強ヲ示セル黄昏ノ如シ。暁ニ近クニ従ヒ、漸次ニ平熱トナル。

廿二日。快晴如前日。此日、終日蓐中ニ在テ静養セリ。午前、福間氏来談セリ、按摩治療ノ儘、治療会談シテ去レリ。午后モ、在蓐静養。六時頃、三十九度二歩、依テ不得已小池医師ノ来診ヲ求メ、服薬シタリ。夜半過、甚シク発汗セシニヨリ、更衣シテ寝ニ就ケタリ。

廿三日。快晴。前夜服薬発汗ノ為メカ、気分甚爽快ヲ覚ヘタルモ、為念尚一日分ノ薬ヲ求メテ服薬セリ。午后、日登ニ横山氏ヲ訪問□□□セシモ不在、令閨ニ挨拶シテ帰木セリ。久々ニテ床ヲ払ヒ、正坐晩餐

ニ向ヘシモ、食量甚進マス、皿酒亦同様ニテ、ヒールヲ所望シテ半瓶ヲ傾ケタリ。夜間、暫時談話シテ、就寝セリ。
廿四日、午前一時頃発熱、又々八度六歩ヲ示シテ、漸次減退シテ、朱七時過ニ至ルリ、七度三歩ヲ示セリ。

【一枚の紙が折りたたんで手帳に挟んである】
釜山　実習女学校
　三島一平

【大正5年渡部寛一郎日記　メモ部分】
釜山富平町一丁め二四　川崎医院
　豊田茂代
同上岸本町濱田貿易商店
　俵　秋子
〃　安田マサ子
　（旧姓　尼川）
京城中学校長　柴崎鉄吉
教師兼書記　藤見睦浩
（女学校教頭）西脇豊蔵
外　内
仁政殿　宣政殿　太造殿　住居也
（禁苑内　宙合楼（休憩所トス）　養蚕室アリ。

別郭ニ演藝堂アリ。入口門　長楽門
第三。逍遙亭　太極亭　小憩所　巌石多し——
翠寒亭　柱ニ
一庭花影春留月
満院松声夜聴濤

（京城ホテル）
小原鉄臣
中原ト改姓。

（有明朝鮮国公州山城）
双松亭紀蹟碑
山城公園最高峰上
一棟ヲ雄心閣ト称ス
瞰下ニ錦江ヲ控ヒ。眺
雄大ナリ。雄心二字寺内総督ノ自署

普通学校校費　地方費
1基本財産　2恩賜金利子
3郷校財産収入　4授業料　0.100.
5寄付金　6国費　校費算入

平。仄

山嵐潤靄雨中天。泮水淡々錦
水連。鄒魯衣冠逢此地。唐虞日
月復今年。主賓揖拝黌堂下。
老少観聴杏樹辺。郷飲礼成
開講席。昇平勝会画図伝。
　崇禎紀元後五、乙卯五月下澣
　　観察使　李明祖
右明倫堂ニ在ル額面

大成至誠文宣王

右〃　　東　廡　　別ニ代祝アリ祭文
　　初献　　亜献　初献　　ヲ朗誦スト云
正殿　亜献
　　三献　　初献　亜献
左酌献　　西　廡　　内門　中門　外門

□【長方形の置き机を表しているらしい】

【図。説明、建物名のみ採録】
尊経閣所蔵
朱文公画像
数幅アリ更ニ
四書大全大本

アリ
　明倫堂　尊経閣　中門　外門

【横書き】晦庵先生朱文公
先生自銘
　端爾躬。粛爾容。検於外。一
　其中。
　力於始。遂其終。操有要。
　保無窮
遺象

山城公園（サンジョウ）　霊徳寺　（禪教両宗　本山麻谷寺出張場）
拱北楼門。

拱北楼上額ノ内
錦江晴日水潺々。城上高楼試
一攀。紅樹秋深人北望。碧空雲尽雁南還。
吟酬令節追遺躅。酔把寒花慰旅顔。客路時〃
今昔恨。不禁双襃涙斑々。
　　観察使　金嘉鎮

○錦南書堂　生徒六人
　書籍　小学　通鑑
○両班　洪鐘協　　書堂アリ生徒五六人
○舎廊＝男子住所【長方形を三つ重ねた見取り図】
○内房

一一〇

書堂先生名
○李起兌　二男　李康丁　普通学校卒業生

◎槿域ナル名称出所・㊢
牡丹臺
禅教両宗
大本山　永明寺

○内地人小学校　○鮮人普通学校
○貞和私立女学校　○開城学堂
○関羽廟　○・・・・・

開城南大門楼　巨鐘銘
（1）　皇帝万歳　法輪常転
　　国王千秋　佛口増輝
大元至正六年云々

（2）掌菘陽書院　鄭夢周ノ旧邸址【崧が正しい】
（3）○善竹橋　鄭氏遭難地
　（御製　道地精忠亘萬古
　　泰山高節圃隠公）

危忠大節光宇宙
吾道東方頼有公
（4）彩霞閣洞　洞主　朴宇鉉

（5）関羽廟
（6）満月臺
（7）朴宇鉉宅

横山耐雪君　村荘　小廬山観瀑
分韻得催。

【参考】
【『剪淞詩文』第六篇附録（大正七年七月発行）】
青丘游草　原三十一首　桃蹊　渡部　寛　稿

大正丙辰、初夏、辞職将遊韓地、賦此留別
嘗尽世間酸与辛、急流勇退志初伸。南薫五月節方好、去作天涯探勝人。
京城雑詠
眼看風物逐年遷、傑閣層楼聳陌阡。猶有民風存旧態、鷺衣烏帽地行仙。
漢陽無量寿山曹谿禅房雅集、席上率賦
漢陽斯地絶塵埃、三面皆山一面開。唱和友人倚禅閣、乾坤無物不詩材。
松声入座吟心爽、竹影横窓暮色催。萍水相逢夙縁在、忘機今夕欲忘回。
無復紅塵到寿山、松声如水水潺湲。願将吟詠永今夕、人世百年誰得閑。
（次魯石韻）
景福宮
輦路荒涼四望同、堪憐禁苑半成叢。残階廃砌無人掃、頭白烏啼古帝宮。
京城客次、訪松永長官
不是尋常汗漫遊、風雲有会志応酬。人間畢竟重知己、欲継前歓君許不。

公州山城公園、即事

層巒起伏儼為城、錦水溶溶繞郭清。双樹亭残伝逸事、雄心閣峙擅佳名。
千秋興廃誰無感、満目烟霞亦有情。孤客逍遥思句久、林端蕭索夕陽傾。

牡丹臺

牡丹臺址枕清流、有客登臨独倚楼。崖樹鬱蒼宜避暑、江天縹渺足忘憂。
山偏起伏青蛇走、帆自浮沈白鷺悠。如此風光誰画得、徘徊欲去幾回頭。

平壌

江闊山高地気清、南韓形勝圧王京。如今無復風塵動、幾処楼臺歌管声。

箕子廟

肇国偉功千古伝、可憐王気漠然遷。于今祠廟餘松柏、異姓慇懃祭祀虔。

満月臺

麗朝末路有誰憐、物換星移跡似烟。唯見城墟存旧態、芊芊荒草想当年。

善竹橋

成敗由来皆属天、鄭公心事転堪憐。西風駐馬松都晩、碧血痕腥一黯然。

金城

短垣矮屋百家村、玉女峯前暫駐轅。山水依然人事改、丹青剥落鎮西門。

釜山

海門潮漲夕陽閑、個個風帆相趂還。決皆東天青一髪、依稀認得対州山。

終

【『剪淞詩文』第七編附録（大正七年十月発行）】

小廬山観瀑集

小廬山集　　耐雪　　横山　大

秋霰閣（元文二年建。大正四年、石埭先生来遊、宿于此。庭有老桂、故名）

坐閣時高誦、小山招隠詩。天風吹月到、秋霰撲書帷。

岩伏山（素尊旧跡。村中第一高山。山頂有巨巌。相伝尊船所化。巌上可望碧雲湖）

蕭蕭微雨過、漠漠前村晦。人間巌伏山、依稀雲霧外。

万杉林（嘉永三年以降所植。杉檜四万餘株、間以老楓。下有清流）

万杉青矗矗、雲与一渓深。来者誰為主、斧斤休入林。

看花塢（渓頭桜雲漠漠、夕陽自遅。伝云、我先世採薬之処）

山人曾採薬、時有白雲遮。一塢非疇昔、春風来看花。

嘉平田（旧嘉平者所有。享保十六年買得之。我家買田之始。隔水多杏花）

閑卻桔槔井、天公雨我田、早秧青尺許、春入一犂烟。

安久寺（安薬師如来像。文化二年帰我有。毎年中元後三夕、招僧供養、兼賞月）

一磬諸天寂、孤庵未掩扉。有僧招薜荔、明月照禅衣。

黄粱碓（村墟日落、炊煙縷縷。近聞水碓響、宛是廬山雲碓）

茅屋炊烟上、前山餘照収。黄粱春未熟、野碓隔雲幽。

楽翁堰（寛政十年、先世楽翁修之、便灌漑、獲新畝数頃。水源多桃花、落紅満堰）

永想先人業、千金水利功。遊魚何乙乙、争唼落花紅。

鳥鳴谷（残雪梅花、黄鳥喈喈。移歩入谷中、大瀑漸近矣。○以上係抵瀑途上景勝）

渓寒雪未消、已有鳥声集。処処見梅花、遊人聯屐入。

伐木橋（是入山第一関也。毎聞丁丁之響、覚山更幽矣）

小橋通谷口、流水碧縈回。何処丁丁響、樵夫時往来。

修竹林（崇山峻嶺之間、修竹娟娟、風香可入）

過橋還過径、修竹密成林。不識人衣湿、翠嵐深更深。

飛流巌（最高丈許、横倍之。老藤糾纏、蘚苔蒙茸。曾欲刻飛流二大字、恐俗了天景而止）

巨石横陰竇、飛流下翠微。劈窩双大字、勢与白雲飛。

琴声瀬（風篁石瀬、愈進愈妙）

泉従竹裏流、冷冷石相語。時有天風和、琴声迷処所。

劈青峡（苔磴柔滑、嵐翠湿衣。拾級而上、遥見飛龍躍天半）

危磴苔痕潤、孤雲石上生。誰開青玉峡、飛瀑眼前明。

碧山荘（荘倚石臨水、主客相対而笑。杳然逝者、豈啻桃花流水哉）

新荘碧山阿、古木散清影。主客笑相対、茶烟一榻静。

泉香舗（青帘翩翩、楓杉映帯。未飲而已酔者、廬山之酒乎）

楓柏何深秀、一帘青帯風。泉香還酒冽、醒酔此山中。

無媒径（碧草蕭蕭、片石当路、是為石埭居士観瀑詩碑）

蕭条微雨歇、芳草自春色。一径是無媒、徘徊情曷極。

観瀑石（其上平面差仄、可坐八九人。飛沫襲衣、有如驟雨）

盤石欹而傾、宜為観瀑処。飛流砕作烟、又被風吹去。

紅葉渡（夕陽在岸、紅葉自落。褰裳渉者、非詩人、則美人）

夕照下前岸、猶餘一抹紅。無風楓自落、秋色乱流中。

漱玉亭（臨水而漱、清冽如玉、寒冷如氷、不復知三伏暑熱也）

有亭名漱玉、巌幽響石泉。三伏不知熱、樹陰移榻眠。

瀉春潭（花影落潭、遊魚乙乙、可以流觴曲水。○従是渓愈邃、山益峻。非攀石梯披雲幕、則不能窺真面目也）

澗道消氷雪、禽声上下親。空潭清洞徹、中瀉一山春。

第一集　大正乙卯五月三十日

乙卯五月尽日観瀑于小廬山　　石埭　永坂　周

廬山雖曰小、面目便相同。石古林容秀、雲寒瀑気雄。悪詩吟未尽、俗

念洗全空。徒有高哉嘆、無才学酔翁。

仝　　秋圃　　中嶋　謹

山容奇且秀、可以比廬峰。崖削千尋壁、瀑垂百丈龍。人寰雲遠隔、仙境霧深封。好是先天下、着来第一蹤。

仝　　井蛙　　井上　留

来訪廬山勝、秀奇真少双。瀑声吹淅瀝、潭影砕琤瓏。引鶴開丹竈、留賓倒玉缸。誰知千丈水、流去入松江。

石埭先生来観瀑喜賦　　耐雪　　横山　大

飛泉噴薄石梯欹、風払紫烟残照披。正有高軒来看瀑、青山尽入画中詩。

第二集　大正丙辰一月廿一日

遊小廬山四律　　盤南　　伊藤　義彦

春雪未融寒夕暉、芒鞋来叩白雲扉。群山同揖囲孤閣、喬木深参蔭翠幃。二百星霜欽祖徳、一株椒桂養神機。料知明月琴尊夕、花下高吟秋霰飛。

廬山誰署小巍巍、聯屐今将度翠微。巒色低昂雲匼匝、谿声断続夢依稀。入林始訝帰禽倦、穿竹相忘去路非。乍見眼前千尺水、猛然瀑気撲吟衣。

已看大筆迸珠璣、莫曰名山問者希。松磴劈青分古峡、雲潭瀉白没春磯。飈嘘陰壑呼龍出、翠滴危巖帯雨飛。十二勝奇吟不尽、一橋残雪阻吾帰。

面目何論大小庵、幾曾夢裡去須車。瀑声雄矣煙呑吐、山色高哉雪巻舒。自也相尋長嘯処、酔翁欲喚浩吟初。祇今来蹈春残雪、一澗陰風吹霧裾。

（次耐雪韻）

盤南詞宗来訪、同賦　　耐雪　　横山　大

寂寞山中旧草廬、東風忽送故人車。梅花欲咲寒仍勒、楊柳小顰春未舒。聯屐過橋残雪裡、停筇観瀑夕陽初。出林豈耐重回首、流水不留雲満裾。

（是日、分「澗道餘寒歴氷雪、石門斜日到林邱」句為韻、聯作十四絶句、今略之）

第三集　大正丙辰十月二十日

游小廬山観瀑　　黙斎　　伊藤　瀬平

擬探仙境結茅鞋。遠望雲南煙霧埋。看到廬山真面目。満林楓葉照閒斎。

仝　　二首

繞屋山楓霜未深。半紅半緑澹秋陰。桃花也好飛如霰。満院幽香灑客襟。

探勝相携雨旧今。小廬山下共披襟。泉声苔色多幽致。洗尽人間名利心。

仝　　活処　　田代　習

探討廬山心久灰。青鞋今日陟崔嵬。雲懸巌角近催雨。水激潭頭遥送雷。霜樹参差生秀色。寒苔重畳絶纖埃。詩魂恍惚真耶夢。十二勝区吟破来。

仝　　井蛙　　井上　留

再游興逾大、欲補旧時文。屋角猿仍叫、堂前鶴自群。山高難吐月、谷邃易生雲。吟歩桂花下、妙香衣上薫。（此夜分「山中有桂花」句為韻、聯作五絶句）。

吟筇暁陟白雲郷、一路銀沙残月光。不怪奇寒透毛骨、前山昨夜有新霜。

默斎将軍来観瀑、賦呈　　耐雪　横山　大

西風黄葉夕陽村、時有将軍来駐轅。恥我平生貧活計、苔痕青上小柴門。

余有故不能趂約、次韻遥寄　　秋濤　渡邊　忠男

杳然神往夢中村、乱水淙淙遥響轅。隠士棲遅知此処、桂花秋霰撲衡門。

寄題小廬山　　其楽　勝部　貫

百尺飛泉奇石阿、参差黄樹掛烟蘿。廬山真趣晩秋景、題詠詩人佳句多。

仝　　桃処　富田　定

半空飛瀑夕陽幽、樹樹錦雲黄欲流。坐憶廬山真面目、渓声岳色自誇秋。

仝　　混泉　森廣　源

白雲紅葉賁秋光、飛瀑林間百丈長。憶到詩人空佇与、小廬山下立斜陽。

仝　　渓窓　小谷　国

名勝雲南別一寰、詩人家在瀑声間。尋常休問秋深浅、昨夜新霜山外山。

〔付記〕

本稿は、

科研費基盤研究（C）研究課題／領域番号　22K00340　近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間二〇二二～二〇二四年度研究代表者　要木純一）

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター　山陰研究共同プロジェクト　近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究（課題番号二二一三　期間　二〇二二～二〇二四年度　研究代表者　要木純一）

による成果の一部である。

Reprint ; Diary of Watanabe Kanichirou: 1916 (II)

Research Project on Works of Watanabe Kanichirou

〔Abstract〕

Watanabe Kanichirou (1854-1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here we transcribe his diary written on 1916. It recorded his tour to Kisuki (Shimane prefecture). There Yokoyama Taisetsu who was a influential poet of those times held a Kanshi poet party.Through this diary we can perceive how Watanabe made a contribution to the world of letters in Sanin district.This reprint also contains memorandums of his tour to Korea.

Keywords: Watanabe Kanichirou, Taisho, Kanshi, Korea, Yokoyama Taisetsu